見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。
神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい
取ってくださる。もはや悲しみも嘆きも労苦もない。古い天と古い地は過
ぎ去り、新しい天と新しい地が来たからである。　（黙二十一・三～四）

悲しむ人は幸いである。その人は慰められるであろう。　（マタイ五・四）

小林喜一先生の信仰　一九六七年五月二十一日　葬儀における感話

先程の略歴にもございましたように、小林喜一先生は戦前から戦後にかけての一時期、東京杉並、馬橋キリストの教会の牧師をしておられました。その時代の先生に縁故のある人間のひとりとして、ご指名を受けまして、感話を申し上げるわけでありますが、実はわたくしは、わたくしも妻も同教会において先生からバプテスマを受け、また先生に結婚の媒酌、司式をしていだいた者であります。そして先生の同教会牧師ご辞任後も、ひきつづき変わらぬご教導とご厚誼をいただきまして、いわば先生の主にある弟子のひとりであります。そしてまことに不肖の弟子ではありますが、そのことを非常に有難く、また名誉に存じているものであります。そういう立場からお話申しあげますので、あるいは個人的な感情を申し述べることになるかも知れません。あらかじめお許しを願っておきたいと存じます。

それでわたくしには、先生の人間的な側面についても、わたくしなりにいろいろ申しあげたいこともあるのですが、ただ今は先生の信仰に限って、少しくわたくしの考えておりますことを申しあげ、先生の野辺の送りに集いましたわたくしども自身の信仰の慰めと致すと共に、ともどもに神の恵みを感謝し、神の御名を崇めたいと思うのであります。

小林先生の信仰は第一に「忍耐の信仰」でありました。

先生は一九三四年に「旧約の律法」という一書を教文館から上梓しておられます。これは旧約聖書の中から

律法その他の規定を抜粋し、出版当時の「現行法に擬してその体系を立て、條文として組織的に列記し、これに解釈を附したもので」（自序）、法律家としての先生の面目躍如たる名著であります。

その後、これの姉妹篇として「新約聖書の恵と真」を出されたのでありますが、これは全七冊、第一冊の発行は一九五〇年で、最後の分冊は一昨年の秋でありますから、実に前後十五年にわたる刊行事業で、しかも先生はこれを全く独力で、自費出版されたのであります。

その内容はヨハネ伝の講解でありますが、付録として説教なども収められていて、「波瀾重畳を極めた私（先生）の信仰生活六〇（七〇）年間の実験談とも言える」（第二冊緒言）のであります。これには先生の福音理解のほとんどすべてが納められている、と言ってよろしいかと存じます。

これは一九三一年、バプテスト派小石川インマヌエル教会においてなした講義の草稿が本になって成った書でありますから、先生は実に三〇有余年の長い間、この一書に心血を注がれたのであります。先生の後半生は実にこの一書に捧げられたと言っても過言ではありません。わたくしがお目にかかる先生は、いつも聖書を開いて本書の原稿の書き直しにいそしんでおられるのでした。伺うところによれば、先生は改訂版を出すべく、なお推敲を続けておられたとのことで、その一部はすでに校正済みであるそうです.

本書を擱筆した時（一九五三年）の喜びを、先生は第二冊の再版の中で次のように言っておられます。「私は与えられた使命を一応了り、主に感謝の祈りを捧ぐる時、この著述の為に今まで二〇余年来経来たった幾多の苦労も打忘れ、内なる人は喜びに躍り、御使と共に声高らかに御名を讃美せずにはおられないのです。」また「少なくも御名の為に多年の努力と忍耐とをもって一事を成し得た事は、豊かな霊の賜として感謝せずにはいられぬ」（第七冊）とも言っておられます。

まことに、先生は一事に固執した方でありました。

先生は徹底した聖書主義者で、聖書絶対無謬説を固く持して動くことがありませんでした。この本の出版に当って「著者のごとき聖書一点張りでは古い古いと問題にされないかも知れませんが、キリストの屯田兵として、毀誉褒貶の外に大胆に敢て出版致します」（第一冊）と言っておられます。

先生はまた厳格なカルビン主義者で、その預定説を奉じて終生変わるところがありませんでした。同じくこの書の第七冊に、一九四九年、ご自分が東京練馬のご自宅に設立された「キリスト教会」は「預定説を採る」旨が明記されています。

そうして先生は、他の何であるよりも、忠実なキリストの弟子、キリストの僕であられました。五つの時から母上に連れられて教会に出入し、一二歳の時にバプテスマを受け、八十三歳で召されるまで、七十年の信仰生涯を、ただただキリストに在って、キリストと共に、キリストとの「屯田兵」として生きられたのでした。

万事におけるこの一途一徹な生き方こそ、小林先生の本領であります。わたくしは、これを忍耐の信仰と呼びたいと存じます。なぜなら、忍耐とは純真にして心一途なことであり、時が良くてもわるくても、ただ神の命を重んじて、右にも左にも曲ることなく、真直ぐに進むことであり、すべてを大能の聖手に委ねて、所与の一事を持続することだからであります。

先生はつねづね「人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」という主イエスの言葉を引いて、信仰を最後までもちつづけることがいかに難しいことであるか、それはただ神のあわれみによる以外にないのであって、だからこそ、そのことがいかに有難く貴いことであるかということを、感にたえたように語られるのでした。そうして、ご自身「戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとお」さ

れたのであります。

忍耐は頑固であることを求めます。小林先生は頑固であられました。このことは、お身内の方が一番よく知っておられ、また少なからぬご苦労もおありであったろうと拝察するのであります。

故人略歴を伺いますと、先生のお母様はバプテスト教会の伝道婦をしておられ、その関係もあって、若い頃宣教師からアメリカの神学校へ留学するよう強く勧められたにもかかわらず、先生は他人の援助で勉学することをいさぎよしとせず、これを断られたということがあったそうです。また弁護士の資格を得られたのも、生涯の半ばを過ぎてからのことであり、大へんな努力の結果、独学でこの難関を突破されたのでありました。

まことに先生の頑固は、自由独立を愛し、克己勉励を貴ぶことにおける頑固でありました。しかもその頑固には法律家らしい厳格な論理が通っていて、先生と意見をたがえねばならない者の、しばしば辟易するところでもありました。

しかし先生の頑固には、もう一つの大きな特徴がありました。頑固はしばしば我がままと結ぶものでありますが、先生の頑固はその正反対で、慎ましいということにおける頑固でありました。この慎みのゆえに、先生の頑固は実に愛すべき、なつかしいものであったのであります。

わたくしは二十年に近い長い間、先生にご恩顧をいただいたのでありますが、この間一度として、先生にものを教えるというような態度のあるのを見たことがありません。孫のような若輩のわたくしに対してさえ、先生はいつも礼儀正しく、つつしみぶかくあられました。

晩年の先生は、人も知る仙人の生活で、めったに外出なさることもなかったようです。福音宣伝の熱心抑え

がたく、弁護士の職をなげうって伝道に専念されたにしては、その生き方はあるいは消極的に過ぎたと言うべきであるかも知れません。クリスチャン法律家としても、伝道者としても、もっと積極的に働くべきであったと評することもできます。

しかしわたくしは、先生の慎みぶかさが、いやむしろ先生の「慎みの信仰」が、それをさせなかったのだと考えるものです。

キリスト教の伝道は先生の若い時からの志でありました。先生はわたくしに、もっと早く牧師になる（伝道を始める）べきであったという感慨を、しばしば洩らされましたし、めくら蛇に怖じざるていの未熟な牧師であったわたくしに、若くして福音宣伝に生涯をささげる決心をしたことは幸福だといって、励まして下さったのでした。それにもかかわらず、いわばその志を得られて、馬橋教会の牧師を勤められた時も、（先生は旧知の宣教師の懇請もだしがたく、この職をひきうけられたのでした。）また関のご自宅で独立の伝道を始められてからも、その伝道は決して世間普通のそれではなく、極めて地味な静かなものでありました。こうした伝道の仕方も、仙人のような生活も、先生にとっては決して隠遁者のそれではなく、内に溢れるものの、もっとも先生らしい、ごく自然な表現にすぎなかったのであると存じます。

先生は伝道の方法に関して二つの立場があるとし、「教を説きながら東奔西走坐っている暇もない程の活躍振りも、一室に閉じこもって専心伝道文書を執筆するのも、神国拡張の努力において少しも変わりはありませぬ」（第一冊下）と言っておられます。そしていずれの立場に立つも要は神第一の信仰である、と説いておられますが、先生ごじしんはどこまでも第二の立場に立つものであること、先生が神から与えられた使命は、先生の言われる「文書伝道」にあることをよく知っておられたのであります。それだからこそ、裁判所書記官と

しての年金を積み立てては、「新約の恵と真」を一冊また一冊と、倦まずたゆまず、黙々と出版しつづけられたのであります。

慎みとは「分を知る」ということであります。（ロマ書十二・三）　先生は自分の分を知り、自分の分を守る慎みにおいて頑固であられました。このことにおいてこそ、まことに頑固そのものであられたのであります。先生はキリストを信ずることをもって神のわざと信じ（ヨハネ六・二九）、世に知られることなく、世に出ることを求めず、静かに深く、謙虚に慎みぶかく、エノクのように神と共に歩まれたのでした。

慎みとはまた、聖書の言うところによれば（第一ペテロ四・七）、何ものにも酔うことなく、心を確かにしていることであります。先生は決して宗教や信仰に酔うことがありませんでした。わたくしは先生とおあいして、宗教的雰囲気を感じたことは一度もございません。人は誰しも、特に宗教人は、老齢になると、安心を求める余り信仰に酔って何事にも円満充足してしまいやすいものですが、先生は八十三歳で召されるまで、自ら「仙人小屋」と呼ばれた教会なる城に立てこもって、よく孤独の生活に耐え、戦うべきを戦い、悩むべきを悩み、誠実に、真剣に、率直に、たくまずに、淡々と生きられたのでありました。

こうした先生の信仰を、ここで先生ご自身に語っていただこうと存じます。これは、わたくしの愛唱する先生の漢詩のひとつであります。

　　砦上高く飜える十字の旌、
　　人来りて道を説き、来たらずして耕す。
　　誰か言う、牧会其の実無しと、

　　我は屯田キリストの兵。（第六冊）

この詩には、先生の、クリスチャンらしい謙遜と、自らを堅く持して憚らない古武士のような風格と、生涯と事業を神の御手にゆだねて動かない全き信頼とが、息づいているではありませんか。

妻とわたくしが最後に先生にお目にかかったのは、亡くなられる五日前の日曜日の午後でありました。その時は、すでに衰弱はなはだしく、ほとんど話をすることはおできになりませんでしたが、すべて良し、すべて感謝と言われるように何度もうなずかれ、何かおっしゃりたい様子なので、わたくしが紙をさし出すと、鉛筆で「天国であいましょう」とお書きになったのでした。そして祈ってくれと言われるので、共に祈ってお別れしたのでしたが、これが地上での最後になりました。

またこの時、わたくしどもが申しあげたある事を喜んで下さって、かすかにほほ笑まれたのですが、わたくしは、先生が時折お見せになった、あのはにかんだようなうれしそうな、幼児のような純真な笑いこそ、先生の人柄と信仰をもっとも良くあらわしていたと存じます。先生のあの笑顔を再び見ることはできませんが、それはわたくしどものまぶたにしっかりと焼きついて、いつまでも消えることはないでありましょう。

先生は言っておられます。「わが国の広き伝道の田に畑に、僕が此の地上の幕屋に留まる間も、去って後も、願わくは主よ、変わりなき御恵の中に、いよいよ好き実を結ばしめ給わんことを」と。（第七冊）　先生は地上の幕屋を去られた後も、あいかわらずに頑固に、あいかわらずに慎ましやかに、わたくしどもの間で働きつづけて下さるでありましょう。そうしてキリストの十字架の贖罪の福音と、それを信ずる「忍耐と慎みの信仰」とを、愛する同胞にいよいよさかんに宣べ伝えて下さることでありましょう。

こんにち、キリスト教界をも含めて、この世が最も必要としているものは、一事に傾倒し、一事に固執し、一事を持続する忍耐と、何ものにも酔うことのない明晰な精神が生むところの厳しい慎ましさではありますまいか。小林先生の生涯と、その信仰的遺産の貴さは実にここにあると信じます。

先生はいつぞや、ご自分の信仰生活をふりかえって、幼い頃母がそうしてくれたように、主が手をとって「しっかり」と言ってくださるので、こんにちまでどうにか信仰の歩みをつづけてくることができた、という意味のことを述懐されたことがありますが、今やその先生が、天からわたくしどもに「しっかり」と声をかけていてくださいます。

非力のわたくしは、生前、先生に何のお報いするところもありませんでした。ただ先生にならって、わたくしもまた「キリストに従う者の幸を痛感して、御命令のまにまに及ばずながら日々働いて」（第一冊）いることと、先生に従って、わたくしもまた、いかにもして「死に至るまで忠実な」キリストの僕であることをもって、先生のご恩顧に報ゆる唯一の途としたいと願っているものであります。

わたくしどもは、先生の司式によって十一月に結婚いたしましたので、毎年その頃には必ず先生をお訪ねし、ささやかな生活のご報告と感謝を申しあげることを常としておりました。先生もこれを喜んでくださって、おみやげのものまで用意して待っていてくださったのでした。その時以外そう度々先生にお目にかかる折があったわけではありませんが、先生のような方が生きておいでになるというそのことが、わたくしどもにとって実に大きな慰めでありました。その先生がもはや此の地上にはおられないと思えば、たえがたい悲しみと寂しさを覚えざるを得ません。

しかし、わたくしどもは徒らに嘆きますまい。ちょうだいしました葬儀のご案内にもありましたように、ご

病気とはいえ、先生はいわば「天寿を全う」されて、愛する奥様と母上の待つ天の御国に帰られたのでありますから。そしてそこで、わたくしどもを待っていてくださるのでありますから。此の岸にはなおしばらく悩みがありましても、やがてわたくしどもはみな「死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない」彼の岸に再びあい集められ、再会を楽しむことができるのであります。

最後に、先生の霊を受け入れ、これに永遠の憩いを与え給うた天の父が、ご遺族ご一同様をゆたかに慰め給わんことをお祈りいたしまして、わたくしの拙い感話を終りたいと存じます。

我　輩　屯　田　基　督　兵
人　来　説　道　不　来　耕
何　疑　七　匝　天　軍　叫
角　笛　高　吹　陥　慮　城　（第六冊）

御跡履み　人の極みと　なるまでは
　忍ぶることの　限りなからん　（第三冊）

主の光　蛍ほどにも　顕さで
　マナともならん　武蔵野の露　（わたくしへの私信から）

人知れぬ　わが伝道の　足跡を
　君は　ほほえみ　見そなわすらむ　（仝右）

（一九六七年五月二十一日、日本キリスト教団四谷新生教会における葬儀において述べたもの）

（所載）「テコア通信」第五十八号　一九六七年七月十日発行